

テキストマイニング及び多変量解析を用いた
“つながり”の構成概念に関する研究

Study of the constructs of "Tsunagari"

Using by Text Mining and Multivariate-Statistics

磯村 真佑 / 押岡 大覚

聖泉大学 人間学部

ISOMURA, Mayu / OSHIOKA, Daisuke Ph. D.

Seisen University, Faculty of Human studies

要 約

本研究は、デジタルネイティブ世代でもある現代青年期大学生に対して“つながり”に関する半構造化面接を実施し、得られた逐語記録をテキストマイニング及び多変量解析を用いて分析し、その構成概念を検討することを目的とした。その結果、【つながりを感じる相手への直接的関わり行動】、【好意の伴わない対人関わり行動】、【個人間の双方向好意】、【ツールを介さない実感の伴う言葉】、【ツールを介した交流】、【見せかけの関係】、【同一性集団とのつながり】、【ツールを介しての関係希求】、【直接対話による親近感】、【一方向的つながり】、【つながり危機】という 11 の構成概念が得られた。11 の構成概念同士の関係性を視覚化した結果、SNS等コミュニケーションツールの使用は、ポジティブあるいはネガティブな“つながり感”を醸成する根底に位置しており、デジタルネイティブ世代でもある現代青年期大学生が【同一性集団とのつながり】を感じる上で重要な役割を果たしていることが確認された。ただし、本研究から得られた結果は限られた対象から得られたものであり、現代青年期大学生が感じる“つながり”全てに通底しているか否かについては一定の保留が必要である。

Key Words: 青年期 デジタルネイティブ つながり テキストマイニング 多変量解析

1. 問題意識と目的

「つながり」あるいは「つながる」という言葉は、日常的にも臨床的にも頻回に用いられる人と人との関係のありようを象徴する表現の一つである。しかし、現在における「つながり」あるいは「つながる」という言葉の用いられ方は、人と人とのつながりだけを指すものではなく、人とモノとのつながりなど様々な用いられ方があると考えられる。

例えば岡田(2013)は、人間とロボットの“つながり感”についての研究を行っている。また、分類学の分野では、実体のないモノ(感覚)はどのように分類されるのかという視点からの考察(三中, 2009)もなされている。

最新版の広辞苑(2017)によれば、「つながり」とは「つながること。また、そのもの。きずな。連繫。関係。」をいう。また、「つながる」とは「離れているものが一続きになる。つらなり続く。ひかれる。ほだされる。結ばれる。関連する。」とある。しかし、インターネットあるいは *Social Networking Service* (以下「SNS」という。)による対人的交流が台頭する現代において、この「つながり」あるいは「つながる」という言葉の用いられ方は、辞書的な意味とは若干の齟齬が生じているように思われる。すなわち、*Twitter* や *Facebook* 等のいわゆる SNS において、相手から送られてきた“友達”リクエストを承認したとき、あるいは相手に送った“友達”リクエストが承認されたとき、その相手が既知の間柄であっても、会ったことのない未知の間柄であっても「つながった」という表現形態に差異はないからである。そこで筆者は、現代における「アナログ的つながり」と「デジタル的つながり」の混在に着目する。

精神分析家である北山(2014)は、「つながり」とは一般に安心と信頼に満ちた象徴的な言葉であると述べている。また、「日常では、つながりはどれほど渴望されようとも、文字通りのつながりを提供してくれる相手を見つけること(合うこと、会うこと)が必要になり、また相手がいても、つながることの合意や約束を得るのが容易でなくなり、その成立が無条件ではなくなった(北山, 2014).」とも述べている。これら北山が述べている「つながり」には、「アナログ的つながり」と「デジタル的つながり」が包含されており、現代における「つながり」のアナログ的側面とデジタル的側面の存在は認められると考えるのが妥当であろう。

つまり、「つながり」とは、所在や人となりが明確であるという意味においてアナログな間柄でのみ醸成される感覚であったはずであるものであるが、現代では未知の対象とのデジタルな、あるいはバーチャルな間柄にも醸成されうる感覚という側面ももつようにな

ったと言えるだろう。

先に述べた広辞苑(2017)による「つながり」のなかには「きずな」という記述がある。

北山(2014)は、「キズナもツナガリもツナ(綱)との深い縁を指摘する語源説があるように、濃厚な人間関係を意味する」が、「綱に依存するなら『しほり』の綱となって複雑にからみつき、がんじがらめになって身動きが取れなくなることもある」とも述べている(北山, 2014)。これは、現代に当てはめて考えれば、「つながり」とは信頼や安心の要因あるいは結果である一方、「綱」による依存、しほり、しがらみ等による日常の対人関係における苦労や“SNS疲れ”の根本を表しているとも考えられる。

三浦・原岡(2002)は、“社会とのつながり”の構造及び心理的幸福感との関係について検討している。そこでは、「対人関係における“つながり”という言葉は、日常語としてのみならず、人間科学的概念としても重要な用語であると考えられる。」と述べており、対人関係における「つながり」の重要性について指摘している。また、山本(2008)による家族間の“つながり感”に関する研究や、教師と学生との“つながり感”に関する研究(山本, 2009)もある。さらに吉田(2003)は、“つながり感”を「個人にとっての人とのつながりの捉え方」と定義し、青年期にある大学生を対象に「ひとりではいられなさ」と「つながり感」の関連について臨床的に検討している。

以上のように、“つながり感”に関する研究は蓄積されつつあるが、これら先行研究は量的研究であったり、限定された間柄における“つながり感”の様相を捉えようとした研究であったり、限定的な問いに対する自由記述を分析対象とした研究である。「アナログ的つながり」と「デジタル的つながり」の混在が認められる現代における“つながり感”の様相や構成要因を捉えるためには、間柄や質問等の限定を設けないインタビュー調査による質的研究による接近が必要であると考えられる。

押岡・鎌倉・寺原(2015)は、「質的研究による分析及び結果の解釈等に際しては、臨床家や研究者の主観の干渉に係る議論が常につきまとう。」と述べ、アナログデータを分析する際の主観の影響を可能な限り統制する方法としてテキストマイニング及び多変量解析を用いた分析方法を採用している。

テキストマイニングとは、自由記述等のテキストデータを分析し、一次資料のみでは見出すことが出来ない有効な情報を発掘する手法の総称である(押岡ら, 2015)。また、この手法を行うことで、テキストデータの分析を行う際に研究者による主観の影響を極力統制することが可能となると指摘している(押岡ら, 2015)。なお、本研究では、テキスト

マイニングのツールとして *IBM SPSS Text Analytics for Surveys* (以下「*TAFS*」という.) を使用する. *TAFS* は, 自由記述等のテキストデータを①研究目的に沿った形で, ある一定の秩序—たとえば, 形態素レベルでの解析, 構文レベルでの解析等—に則り, キーワード単位に分割し抽出することが可能であること, ②抽出されたキーワードは, 言語学ベース, もしくは出現頻度ベースにより機械的にカテゴリ化が可能であること, ③カテゴリ化されたものをまとめたり, 洗練したりする作業を直感的操作によって行うことができること等がその長所として挙げられる (押岡ら, 2015).

以上を踏まえ, 本研究ではデジタルネイティブ世代でもある現代青年期大学生に対して “つながり” に関する半構造化面接を実施し, 得られた逐語記録をテキストマイニング及び多変量解析を用いて分析し, その構成概念を検討することを目的とする.

2. リサーチ・クエスション

現代青年期大学生が考える “つながり” の構成概念にはどのようなものがあり, それらにはどのような関係があるのだろうか.

3. 方法

3-1. 研究協力者

本研究の研究協力者は, 近畿圏の私立大学で心理学を学ぶ大学生 10 名 (男: 5 名, 女: 5 名) であった.

3-2. 調査方法及び分析材料並びに分析方法

研究目的や調査方法, 個人情報保護等について同意書を用いて説明した後, 研究協力者それぞれから署名にて同意を得た. 次に, 「つながり」あるいは「つながる」という言葉から連想することについての自由記述を求め, 得られた自由記述を元に 1 対 1 の半構造化面接 (以下「インタビュー」という.) を実施した. インタビューの内容については, 研究協力者の同意を得た上でボイスレコーダーに録音し, インタビュー終了後に逐語記録を作成した. 研究参加者の語りの雰囲気可能な限り再現して作成された逐語記録を, *Microsoft Excel 2010* (以下「*Excel*」という.) へ転記しローデータの作成を行った. その際, 研究協力者の発言それぞれに *ID* を割り振った.

Excel に転記したローデータを *TAFS* にインポートした後, 研究協力者の心の動きを把握することに重きを置く感性分析によりキーワードを抽出した. 抽出されたキーワードをカテゴリーとして抽出する際には, 樋口 (2004), 大和 (2010), 山西 (2011), 林原ら (2011 a, b), 他の先行研究を参考に, 暫定的な基準として出現頻度 10 回以上のキーワードを第

1次カテゴリとして機械的に抽出した。抽出された第1次カテゴリ及び出現頻度9回以下のキーワードに対して、①日本語・英語で記された内容、例えば、「ツイッター」と「*Twitter*」の統合、②意味による統合—例えば、「自分」、「自分自身」、「私」の統合、③単体では意味の付与が困難なキーワード、例えば、「いる」、「ある」、「なる」の削除、を中心とした洗練作業を施した。その際、①どのキーワードをどのカテゴリに追加したのか、②どのカテゴリ同士を統合したのか、③どのカテゴリを削除したのか、そして、④それぞれの理由、の4点を時系列的に記した分析ノートを作成し、*TAFS*による分析過程を記録した。なお、カテゴリの洗練作業等は、先行研究及び分析ノートを参考にしながら、共同著者である指導教員との綿密な議論を重ね修正・検討を行った。洗練作業が飽和状態に達した第2次カテゴリを統計学的に要約する目的から、*TAFS*より得られた第2次カテゴリを変数とした主成分分析を行い、「つながり」あるいは「つながる」ということについての主成分を抽出した。なお、本研究では統計解析ソフトとして、*Social Survey Research Information Co., Ltd BellCurve for Excel*を用いた。また、主成分分析から得られたそれぞれの構成概念同士の関係性を把握する方法—具体的には、視覚化及び文章化—は、山浦（2012）による質的統合法（KJ法）を参考にした。なお、視覚化で使用した関係記号を以下、図1に示した。

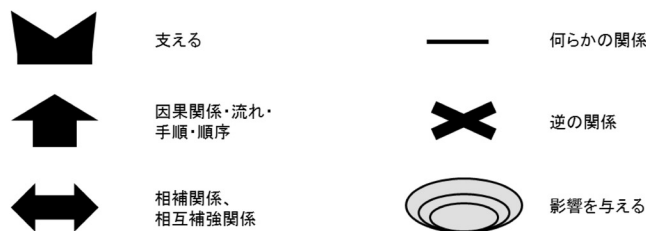


図1 関係記号（山浦，2012）

4. 結果

4-1. 主成分分析

半構造化面接より得られた「つながり」あるいは「つながる」ということについて、感性分析によりキーワード抽出を行った結果、3,049個のキーワードが抽出され、出現頻度10回以上のキーワード、①相手（592回）、②感じる・思う（585回）、③つながり（583回）、④関わり行動（388回）、⑤自分（271回）、⑥グループ（220回）、⑦コミュニケーションツール（155回）、⑧家族・親戚（119回）、⑨一緒（79回）、⑩対人関係（67回）、⑪実感（41回）、⑫好意（34回）、⑬気持ち（28回）、⑭身体（27回）、⑮距離（27回）、

⑬一人 (25 回), ⑭仲良い (22 回), ⑮合う (22 回), ⑯縁 (20 回), ⑰深い (20 回), ⑱言葉 (16 回), ⑲お互い (15 回), ⑳存在 (14 回), ㉑血 (10 回) の 24 個を第 1 次カテゴリーとして機械的に抽出した。機械的に抽出した 24 個の第 1 次カテゴリー及び出現頻度 9 回以下のキーワードについて, 複数回の確認・洗練作業を行った結果, ①つながり, ②相手, ③距離, ④言葉, ⑤縁, ⑥存在, ⑦一緒, ⑧深い, ⑨一人, ⑩自分, ⑪仲良い, ⑫家族・親戚, ⑬コミュニケーションツール, ⑭気持ち, ⑮対人関係, ⑯お互い, ⑰合う, ⑱グループ, ⑲好意, ⑳実感, ㉑感じる・思う, ㉒関わり行動という 22 個の第 2 次カテゴリーが生成された。TAS から得られた 22 個の第 2 次カテゴリーを統計学的に要約するために主成分分析を行った。主成分分析の結果を以下, 表 1 に示した。

表 1 主成分分析の結果

変数	主成分										
	主成分1 つながり	主成分2 相手の存在	主成分3 距離	主成分4 言葉	主成分5 縁	主成分6 存在	主成分7 一緒	主成分8 深い	主成分9 一人	主成分10 自分	主成分11 仲良い
つながり	0.90	0.15	0.30	0.05	-0.01	-0.33	-0.09	0.24	0.05	0.05	-0.02
相手	0.24	-0.00	-0.26	-0.23	-0.09	0.13	-0.27	0.13	-0.08	0.00	-0.02
距離	0.06	0.14	0.19	-0.02	-0.19	-0.04	-0.04	0.01	-0.19	-0.19	-0.27
言葉	0.10	-0.25	0.04	0.37	0.11	-0.19	-0.33	0.19	-0.19	0.11	-0.10
縁	0.01	0.00	-0.15	0.11	-0.19	-0.40	-0.23	0.19	-0.11	0.23	-0.33
存在	0.12	-0.05	0.12	-0.17	-0.00	-0.17	-0.41	0.18	-0.15	0.17	-0.43
一緒	0.19	-0.49	-0.12	0.01	0.09	0.07	0.18	0.18	-0.15	0.18	-0.12
深い	0.16	0.16	0.12	-0.19	0.02	-0.27	0.08	0.15	-0.10	0.15	-0.12
一人	0.08	0.13	-0.10	-0.19	0.42	-0.14	-0.24	0.13	-0.08	-0.13	0.00
自分	0.46	-0.29	0.16	-0.22	-0.05	-0.24	0.01	-0.16	-0.05	0.06	0.00
仲良い	0.08	0.12	-0.04	0.09	-0.32	-0.14	-0.22	-0.21	-0.24	-0.12	-0.17
家族・親戚	0.24	0.12	-0.45	0.02	-0.16	-0.12	-0.15	-0.21	-0.09	0.17	-0.04
コミュニケーションツール	-0.10	0.00	-0.08	-0.28	0.49	0.07	0.22	0.12	0.15	0.22	0.15
気持ち	0.16	-0.41	0.01	0.17	0.15	0.12	0.14	0.14	-0.22	-0.22	0.22
対人関係	0.15	0.31	0.05	-0.04	-0.23	-0.17	0.17	-0.23	-0.22	0.01	0.16
お互い	0.08	0.17	0.38	0.13	-0.19	-0.16	-0.27	0.27	-0.13	-0.39	0.13
合う	0.14	0.27	0.09	-0.15	0.22	0.42	0.13	0.13	-0.20	0.26	0.18
グループ	0.19	-0.08	-0.30	-0.01	-0.49	0.01	0.29	0.07	-0.11	-0.11	0.10
好意	0.24	-0.49	0.04	-0.22	0.07	-0.02	-0.15	0.02	-0.12	-0.28	-0.38
実感	0.18	-0.07	-0.13	0.55	0.16	-0.22	0.12	0.19	0.04	-0.12	0.14
感じる・思う	0.00	0.15	0.22	0.24	0.13	-0.12	0.01	0.07	0.01	0.08	-0.08
関わり行動	0.41	0.29	-0.22	-0.13	0.19	-0.12	-0.13	-0.13	0.04	0.08	0.13
変数総数	1.82	1.22	1.19	1.11	1.09	1.06	1.06	1.06	1.04	1.03	1.00
変数比率	7.4%	12.3%	13.3%	9.4%	9.4%	9.3%	9.3%	9.3%	9.2%	9.1%	8.5%

主成分1は固有値 1.62, 主成分2は固有値 1.22, 主成分3は固有値 1.19, 主成分4は固有値 1.11, 主成分5は固有値 1.10, 主成分6は固有値 1.06, 主成分7は固有値 1.05, 主成分8は固有値 1.04, 主成分9は固有値 1.03, 主成分10は固有値 1.01, 主成分11は固有値 1.00 であった. 主成分12は固有値 0.99 で 1.0 以下であったため, 固有値 1.0 以上の 11 成分を主成分として採用した.

主成分1は, 変数「感じる・思う」, 「相手」, 「つながり」, 「自分」及び「関わり行動」が正の方向へ特に大きいという特徴を示していた. そこで, 主成分1を【つながりを感じる相手への直接的関わり行動】と解釈した. 主成分2は, 変数「関わり行動」, 「対人関係」及び「合う」が正の方向へ特に大きく, 変数「気持ち」, 「一緒」及び「好意」が負の方向へ大きいという特徴を示していた. そこで, 主成分2を【好意の伴わない対人関わり行動】と解釈した. 主成分3は, 変数「つながり」, 「お互い」, 「対人関係」, 「好意」及び「感じる・思う」が正の方向へ特に大きく, 変数「家族・親戚」及び「グループ」が負の方向へ大きいという特徴を示していた. そこで, 主成分3を【個人間の双方向好意】と解釈した. 主成分4は, 変数「実感」及び「言葉」が正の方向へ特に大きく, 変数「自分」及び「コミュニケーションツール」が負の方向へ大きいという特徴を示していた. そこで, 主成分4を【ツールを介さない実感の伴う言葉】と解釈した. 主成分5は, 変数「コミュニケーションツール」及び「一人」が正の方向へ特に大きく, 変数「グループ」が負の方向へ大きいという特徴を示していた. そこで, 主成分5を【ツールを介した交流】と解釈した. 主成分6は, 変数「合う」及び「対人関係」が正の方向へ特に大きく, 変数「縁」, 「一人」, 「つながり」及び「存在」が負の方向へ大きいという特徴を示していた. そこで, 主成分6を【見せかけの関係】と解釈した. 主成分7は, 変数「一緒」, 「お互い」, 「つながり」, 「グループ」, 「縁」及び「相手」が正の方向へ特に大きく, 変数「仲良い」, 「家族・親戚」, 「実感」, 「自分」及び「存在」が負の方向へ大きいという特徴を示していた. そこで, 主成分7を【同一性集団とのつながり】と解釈した. 主成分8は, 変数「深い」及び「コミュニケーションツール」が正の方向へ特に大きく, 変数「合う」が負の方向へ大きいという特徴を示していた. そこで, 主成分8を【ツールを介しての関係希求】と解釈した. 主成分9は, 変数「言葉」, 「合う」, 「実感」及び「縁」が正の方向へ特に大きく, 変数「一人」及び「距離」が負の方向へ大きいという特徴を示していた. そこで, 主成分9を【直接対話による親近感】と解釈した. 主成分10は, 変数「縁」及び「気持ち」が正の方向へ特に大きく, 変数「お互い」及び「仲良い」が負の方向へ大きいという特徴を示してい

た. そこで, 主成分 10 を【一方向的つながり】と解釈した. 主成分 11 は, 変数「存在」及び「お互い」が正の方向へ特に大きく, 変数「好意」, 「距離」及び「縁」が負の方向へ大きいという特徴を示していた. そこで, 主成分 11 を【つながり危機】と解釈した.

4-2. 構成概念の視覚化及び文章化

主成分分析から得られた 11 の構成概念同士の関係を視覚化したものを以下, 図 2 に示すとともに構成概念同士の関係の文章化を行った.

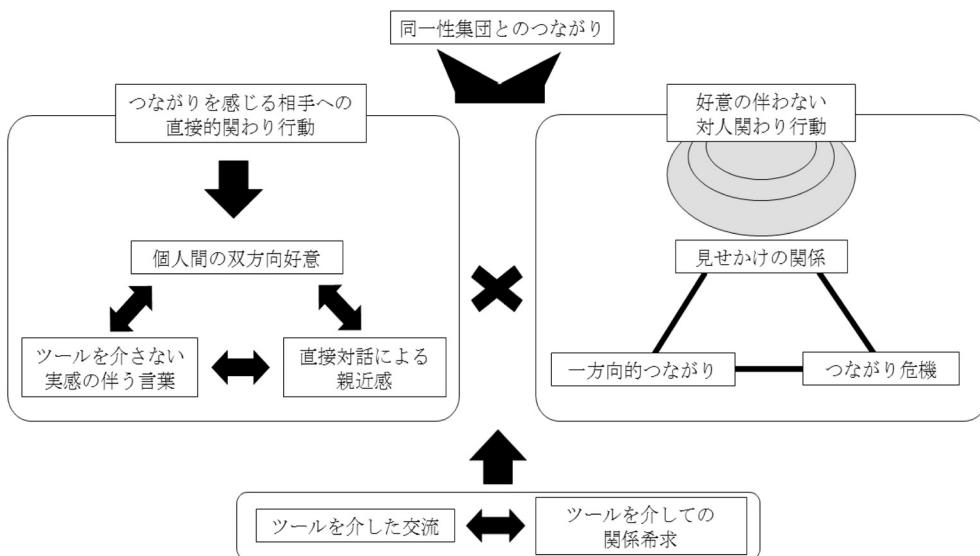


図 2 “つながり”の構成概念の視覚化

デジタルネイティブ世代でもある現代青年期大学生における“つながり”は, 【ツールを介した交流】と【ツールを介しての関係希求】が関係していると考えられた. そして, 【ツールを介した交流】と【ツールを介しての関係希求】が【つながりを感じる相手への直接的関わり行動】及び【好意の伴わない対人関わり】をそれぞれ引き起こすと考えられた.

【つながりを感じる相手への直接的関わり行動】には, 【個人間の双方向好意】, 【ツールを介さない実感を伴う言葉】, そして【直接対話による親近感】の三つがそれぞれ相互補完的な関係にあると考えられた. 【好意の伴わない対人関わり行動】は, 【見せかけの関係】, 【一方向的つながり】, 【つながり危機】の 3 つに何らかの影響を与えると考えられた. 【つながりを感じる相手への直接的関わり行動】と【好意の伴わない対人関わり行動】は, 相反する関係にあると考えられ, これら相反する 2 つの構成概念を基盤として【同一性集団とのつながり】に発展すると考えられた.

5. 考察

本研究は、デジタルネイティブ世代でもある現代青年期大学生 10 名（男性 5 名・女性 5 名）に対して“つながり”に関する半構造化面接を実施し、得られた逐語記録をテキストマイニング及び多変量解析を用いて分析し、その構成概念を検討することを目的とした。以下、考察を述べるにあたって、得られた 11 の構成概念それぞれを象徴するローデータを *ID* とともに「 」で記した。

現代青年期大学生における“つながり”の中心的関心の対象は、「何か同じ目標があってそれに向かって一緒にやってる時。(D-CL26)」や、「高校の時のクラスメイトとか。(G-CL161)」等に象徴される【同一性集団とのつながり】であることが確認された。そして、この【同一性集団とのつながり】には、二つの側面が存在することが考えられた。

一つは、「自分のために（物を）くれたんだなって思う。(D-CL199)」や、「挨拶されたらつながり感じるよね…。(E-CL322)」等に象徴される【つながりを感じる相手への直接的関わり行動】。もう一つは、「でも、社交的にご飯に定期的に行っいたら、『まあ、つながっとけるやろ。』みたいな人もいるから…。(A-CL174)」等に象徴される【好意の伴わない対人関わり行動】であった。すなわち、【同一性集団とのつながり】の基底には、ポジティブな側面とネガティブな側面という二つの側面が存在しており、ポジティブな側面である【つながりを感じる相手への直接的関わり行動】を構成している構成概念グループと、ネガティブな側面である【好意の伴わない対人関わり行動】を構成している構成概念グループは表裏一体の関係にあると考えられた。

“つながり”のポジティブな側面である【つながりを感じる相手への直接的関わり行動】には、「何か、頑張ってるって基本他人事で、ただ投げかけてる言葉みたいなイメージがあるけど、『一緒に頑張ろう』って…『一緒に』ってついてるけど、言葉通り自分の気持ちも分かってくれて。(F-CL171)」等に象徴される【ツールを介さない実感の伴う言葉】。「その時に先生が言った言葉は『あー、こういう事なんかな。』とは思ってました。(J-CL166)」等に象徴される【直接対話による親近感】。「なんか私はご飯食べにいくとか、誘うっていうのは、なんかしらこの人とつながっていたいってお互い思っていないから、なんかその場面が浮かんだ。(A-CL153)」や、「距離が近くなっていくことを感じてたら、やっぱつながりもつながってるって感じるし、強いつながりに変わっていくんじゃないかなって。(G-CL93)」等に象徴される【個人間の双方向好意】の三つがあり、これらの好循環が発生することで、【つながりを感じる相手への直接的関わり行動】が起こる

と考えられた。

一方、“つながり”のネガティブな側面である【好意の伴わない対人関わり行動】には、「だから、偽りのつながり…相思相愛じゃないけど、一方的にいつちゃってるから、相思相愛ってことじゃないから。(B-CL308)」や、「温かい食べ物出てきたら、作ってくれた人に対しての気持ちってうか、『これは絶対誰かが作ってて、自分はそれを食べてるんだ』みたいなのでつながりを感じたりしない?(D-CL208)」等に象徴される【一方向的つながり】。「そしたら、もし相手が心の中で嫌って思っても…優しくされたりとかしたら、好かれていると思う気がします。(H-CL250)」等に象徴される【見せかけの関係】。「例えば、スポーツしててもがっかり競技スポーツで、何かお互い苛ついてムッとして喧嘩とかしたら、つながれないし、『あいつ嫌いだ。』ってなるじゃん。(B-CL175)」や、「だから、自分の好意が前提として、自分が好きでもし相手が自分の事嫌いでも、自分が…。(H-CL247)」等に象徴される【つながり危機】という三つがあり、これらの悪循環が発生することで【好意の伴わない対人関わり行動】が起こると考えられた。

ポジティブな側面である【つながりを感じる相手への直接的関わり行動】を構成している構成概念グループと、ネガティブな側面である【好意の伴わない対人関わり行動】を構成している構成概念グループの根底には、現代社会の発展により使用されるようになったSNSなどのツールの存在があると考えられた。「そこから、知り合いから始まり…その、何かSNSとかでやり取りし始めたら…うん。(I-CL138)」や、「Twitterとかはフォローとか、フォローしてる・されてるってことは何らかのつながりがあったってことじゃない?(E-CL138)」等に象徴される【ツールを介した交流】。「それをTwitterで言ったら、『いやー。』っていう、『空いてるよー。』って言われて、全く顔も知らない…性別くらいはわかりますけど。(H-CL70)」等に象徴される【ツールを介しての関係希求】というこの二つの相補関係が、“つながり”のポジティブな側面とネガティブな側面の表裏一体性に関係していると考えられた。また、SNS等コミュニケーションツールは、ポジティブあるいはネガティブな“つながり感”を醸成する根底に位置しており、デジタルネイティブ世代でもある現代青年期大学生が【同一性集団とのつながり】を感じる上で重要な役割を果たしていることが確認された。ただし、本研究から得られた結果は限られた対象から得られたものであり、現代青年期大学生が感じる“つながり”全てに通底しているか否かについては一定の保留が必要である。今後、引き続きの検討を要する。

付記

本研究は、第一著者である磯村真佑の卒業論文、「テキストマイニング及び多変量解析を用いた“つながり”の構成概念に関する検討」に一部加除修正を施したものである。

参考・引用文献

- ハフシ・メッド (2010). 「絆」の精神分析—ビヨンの原子価の概念から「原子価論」への旅路 ナカニシヤ出版
- 林原 慎・藤井志保・宮里智恵・伊藤圭子・平川幸子 (2011 a). 小学校における国際理解の視点を取り入れたジェンダー教育の効果に関する研究 広島大学学部・附属学校共同研究紀要, 39, 249-254.
- 林原 慎・川崎正盛・小早川善伸・安松洋佳・中村千絵・深澤清治・平川幸子 (2011 b). 多文化共生社会の視座に立つ小学校外国語活動の単元開発に関する研究—テキストマイニングによる効果の分析 広島大学学部・附属学校共同研究紀要, 39, 177-182.
- 樋口耕一 (2004). テキスト型データの計量的分析：2つのアプローチの峻別と統合 理論と方法 19 (1), 101-115.
- 北山 修 (2014). 意味としての心—『私』の精神分析用語辞典 みすず書房
- 三中信宏 (2013). 分類思考の世界 なぜヒトは万物を「種」に分けるのか 講談社現代新書
- 三浦直樹・原岡一馬 (2002). 中高生における“社会とのつながり”と心理的幸福感の関係 久留米大学心理学研究, 1, 71-79.
- 中村 明 (2011). 日本語 語感の辞典 岩波書店
- 新村 出 編 (2017). 広辞苑 第七版 岩波書店
- 押岡大覚・鎌倉利光・寺原美歩 (2015). テキストマイニング及び多変量解析を用いたフォーカシング指向グループの体験分析—グループ・プロセスに関する仮説生成の試み—【第一報】 聖泉論叢, 23, 1-12.
- 押岡大覚・鎌倉利光・寺原美歩 (2016). テキストマイニング及び多変量解析を用いたフォーカシング指向グループの体験分析—グループ・プロセスに関する仮説生成の試み—【第二報】 聖泉論叢, 24, 33-44.
- 押岡大覚・鎌倉利光 (2017). テキストマイニング及び多変量解析を用いたフォーカシング指向グループの体験分析—グループ・プロセスに関する仮説生成の試み—【第三報】 聖泉論叢, 25, 19-30.
- 時岡良太・佐藤 映・児玉夏枝・田附紘平・竹中悠香・松波美里・岩井有香・木村大樹・鈴

- 木優佳・橋本真友里・岩城晶子・神代末人・桑原知子 (2017). 高校生の LINE でのやりとりに対する認知に現代青年の友人関係特徴が及ぼす影響 パーソナリティ研究, 26, 76-88.
- 山本恵子 (2008). 「つながり感」尺度の検討 (1) ～家族版～ 日本教育心理学会第 50 回総会発表論文集, 337.
- 山本恵子 (2009). 教師と学生との「つながり感」尺度の作成の試み 日本教育心理学会第 51 回総会発表論文集, 491.
- 大和里美 (2010). キャリア教育における参加型授業の有効性に関する検討—テキストマイニングによる効果分析 太成学院大学紀要, 12, 139-149.
- 山西博之 (2011). 教育・研究のための自由記述アンケートデータ分析入門: SPSS Text Analytics for Surveys を用いて Retrieved from <http://www.mizumot.com/method/yamanishi.pdf> (2019 年 11 月 7 日).
- 山浦晴男 (2012). 質的統合法入門—考え方と手順 医学書院
- 吉田加代子 (2003). 青年期の「ひとりでいられなさ」と「つながり感」—文章完成法・面接法を用いて— 日本青年心理学会大会第 11 回大会発表論文集, 48-49.